

ん走つたる聲、秋の夕の尺八は、殊にあはれ深し。すさまじきものは、白粉こくつけたる女の、襟くび丈けは、忘れてか其儘に残したる、男のカラーの襦色になりたる、袴もなき和装の貴女の舞踏、さては、女の憤怒りたる顔こそ、いみじくゆゝしきものなれ、男もさらぬにはあらねどこれは猛きが常なるに、女は柔和をもて本性とすればことさら、

▲無邪氣なる幼児の天真爛漫なるこそ愛らしけれ一角分別盛りの男女の、他人の感情、思はくの如何をも願みず、ひたすら、己が思ふまゝをいひ、感ずるまゝに振舞うて、人は兎角、包み隠しなき天真爛漫こそよけれなどいふ、いみじく悪し。世には、眞實さらぬも、ことさらにかく装ふ人ありこは非事なり、とかくは磊落を装ふ人ほど、俗の

結晶體と知るべし。又、眞實、天真爛漫らしき人もあり、ある文士は、かゝる人こそ、感情の訓練せられざる、憐れむべき人なりといへり、げにやかゝる人のみ、ならましかば、世はとこしへに争のみならまし。禮儀とは、或度までは、己が感情を包みかくすに在りと知らずや

▲可笑しきは、三歳四歳が程、外つ國に留學して歸朝りませる人の、始めて、日本に來り給ひけん人の風したることにぞある、さるはいみじくハイカレル新歸朝者の「左様、確か神田の錦町とかいふ町に云々」と語らるゝを聞き、覺えずもうちほゝえまれてかくなん。

○フレーベル會俳句端書集

一、課題 夏季雜吟一人十句以下

一、べ切 七月二十五日限り

一、披露 九月發行本誌文苑欄

一、賞品 天地人三座には美景を呈す

一、撰者 當分本會の撰とす

一、投稿 本紙講讀者は何人にも投吟すること

を得用紙は端書に限り(可成繪端書に
記載せられたし)住所氏名雅號を明記
し都合上必ず左の名宛にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村

フレイベル會俳句掛

鹽 野 奇 零

●そのふりく 無一庵 奇 零

魚籠打や昨日の雨のうす濁り

願夏に取巻かれけり合歡の花

踏次あけて客を通しぬ二十日草

釣竿に引よせて見るぬなはかな

避暑に行く箱根の路や蟬時雨

五月雨や舟へ積出す茶の火入

憂き戀に引さく文やほととぎす

水飯や鶯老えし山の寺

鞍すれをかゆがる馬や若葉蔭

植付ける小溝のへりや餘り苗

前垂に一つちざりて初茄子

月の出て居場所更へけり草

翡翠や川にのりだす瘡やなぎ

月下氷人に顔かくしけり絹うちば

●第六號俳句募集は豫告により第八號紙上に掲載
すべし